

## 火曜

いつもと変わらない月曜日が終わり、火曜日になった。そしてそのあとには、いつもと変わらない水曜が来るはずだった。いつもと変わらない一週間が続くはずだった。

火曜日の六時間目。二年B組の化学の授業。

午後の授業というものには、誰だつて集中できないものだ。腹の皮が突つ張れば、眼の皮がたるむ。それは生徒だけでなく、我々教師とて同じことだ。特に私のように、やる気も情熱も責任感も使命感も教育理念もない駄目教師ならなおのことだ。

授業時間の大半が過ぎたところで、今日はやはり「実験」にしておけばよかった、と後悔した。

教壇から見渡しただけで、およそ半分の生徒が睡眠学習をしている。残り半分のうち、授業を聞いていると思しい生徒は十名強——クラスのおよそ四分の一だ。そのほかの生徒は、耳にヘッドフォンを突つ込んで体を揺らしたり、携帯電話でメールを素早く打ち込んでいたり、小型ゲームに機に興じていたり、漫画雑誌を読んで肩を震わせて笑ったり、手鏡に向かって枝毛を抜いたり（これは男子生徒だ）、カッターナイフで机の上に何か彫り込んだりといった仕事で、教室内の生徒はみな、彼らなりにそれぞれ忙しい様子だった。あろうことか、英語の問題集——しかも進学塾の——を開いて熱心に勉強している生徒すらいた。

実験の授業なら、生徒たちにそんなことをさせずに済む。ただでさえ退屈し、弛緩している昼下がりの生徒たちの脳細胞に、多少なりとも刺激を与えることができただろう。B組の次回の授業は、金曜の一时间目だった。あわただしい一時間目は、教室移動のある実験をやるにはあまり適切ではない。やはり今日、実験にすべきだった。私はますます後悔した。

が、今この瞬間、教室が騒がしいわけではない。私の授業を聴いてくれている両手で数えられる生徒の邪魔になることをやっている生徒はいない。学級崩壊はしていない。一見すると、静かで落ちついた教室に見える——見えるだけだが。しかしそれでいいではないか。

私は思う。彼らに、無理に無能な私の授業を聴かせる必要はない。暖かくやわらかな光と空気に満ちた昼下がりひとときに、彼らにわざわざ苦痛を与える必

要はないじゃないか。

所詮、私のような人間が教壇に立って行なっている授業なのだ。

そんなことを考えていると、声がした。

「できたけど」

女子生徒が、ぶっきらぼうな口調で私の傍らから言った。よく太った彼女は  
前田香奈子まえだかなこだった。二年B組のなかでも何かとよく目立つ、いわばリーダー的な生徒だ。

私は、自分で彼女に「ヘスの法則」を用いて、1モルの一酸化炭素の生成熱を  
求める式を黒板に書かせたことを忘れかけていた。

「どれ」

私は内なるささやかな狼狽を隠し、黒板に描かれた彼女の解答を見た。

「残念。惜しいけど、違う」

「はあ？ ウソばつか！」

前田香奈子は眉間にしわを寄せて頓狂な声を上げた。生徒たちからは、わずかな薄い笑い声。

教師に向かって「ウソ」はないだろう、と、一瞬だけは思った。が、私はその  
程度の教師だと考え直した。軽く笑ってみせた。無理に笑顔を作りながら、なぜ  
生徒に向かって愛想笑いなどしているのだろう、と疑問が膨らんだ。

「えーっ？ だって一酸化炭素でしょ？」

「そう、1モルのCOの生成熱ということだよ」

私はそう言いながら、そつと腕時計を見た。三時三十一分。私の時計は三分進  
んでいるから、あと二分で、授業は終わる。眠く、退屈で、活気のない、気だる  
い六時間目の授業が、あと百二十秒で終わってくれる。

しかし、待つ二分というのは長いものだ。私は彼女に考える時間を与えるふり  
をして、チャイムが鳴るまでの時間をつぶした。

あと一分三十秒あまり。

「あー、なんか数学の時間みたいじゃん。化学も数学もキライ……」

前田香奈子は黒板拭きを手にとると無造作に彼女の書いた熱化学方程式を直  
し始めた。

「百十一キロジュール、で、いいでしょ」

なぜか怒ったような口調で前田香奈子は言った。

「はい、その通り、正解」

彼女はべつにうれしそうでもない様子で席に戻った。

「前田が言ったとおり、これは中学校の数学で習った連立方程式とほとんど同じ考え方で解けるはずです。それが解けないというのは……中学の数学をやり直しだね」

そう一気に言った。生徒からのリアクションは、なし。時計を見た。あと十二秒。

そのとき確かに私は生徒たちと心をつにしていただろう。

——早くチャイムが鳴ってくれ。

そう一緒に願っていただろう。

そんなことでしか、私は生徒と心を通わすことができない。

十二秒は、意外に長かった。時間つぶしに私は言った。

「質問は……何かありますか」

教師として、最低の不毛で無意味な台詞だ。

いまだかつてこのクラスで、いや、私の担当している二年A、B組、三年B、C組の生徒から質問が出たことは一度もなかった。だいたい今どきの生徒は、授業中に挙手をして教師に質問などしたがらないものだ。今ここで質問が出れば、かえって私のほうが困る。

あと七秒。

ここでまた、私は生徒と気持ちを同じくして祈るのだ。どうか質問が出ませんように。どうか授業が延長しませんように。

そしてチャイム。

ふうっという安堵のため息のような呼吸音が教室に満ちたように聞こえたのは、私の気のせいかな。

「はい、今日はこれで終わります」

すかさず女子の委員長である瀬田みずすが「起立！」と号令を発した。このクラスは、どんなことでも、女子生徒が男子生徒たちを仕切って、引っ張っている

ようだった。

「礼！」

つい先ほどまでの授業中の態度とはうって変わった元気のいい声だった。予備校の英語の問題集を開いたまま、半分うとうとしていたはずだったが。

火曜日の、私の授業が終わった。

職員室に戻り、B組の出席簿を所定の棚に収めると、ドアに程近い自分の席に着いた。

そのときになって、B組に次回は実験を行なうことを予告してこなかったことを思い出した。今すぐになら、帰りのホームルームに出かける前の2Bの担任を捕まえて、連絡を頼むことができた。が、その担任は浦辺うらべだった。腹が出て脂ぎった浅黒い顔をした浪花節声の五十代の数学教師だった。生徒にはそこそこ人気があつたが、私の苦手な教師だった。

顔を上げて、彼の机のほうを見た。ちょうど立ち上がり、C組の担任である宮本

みやもと

4

はなこ華子と連れだつて、何か楽しみに話しながら職員室を出ていくところだった。

我知らず、ため息が出た。浦辺と話すだけでも苦痛なのに、その横には宮本華子までいるのだ。浦辺があんなにニタニタと相好を崩しているのも無理はない。宮本華子は、眼にやや陰のある美人だった。顔の作りも着るものも派手で、確かにその名の通り、立っているだけで、職員室、そして教室がぱつと明るくなるような華のある教師だった。きつとそれは、教師としてすばらしい資質の一つなのだろう、と思う。

しかし宮本華子は、数多い我が校の職員の中なかでも、私をもっとも苦手とする教師だ。私は彼女に、その魅力的な——と男の教師の大半が思っているらしい——笑顔を向けられたことがなかった。私よりひと回り年長の彼女が、私を「鼻であしらっている」というのなら、まだいい。私は、彼女に心底から嫌悪されてきた——無気力、無能な唾棄すべき駄目教師として。

同僚に嫌悪されるのは、相手が誰であれつらいことだ。それに、美人に嫌悪さ

れるというのは——たとえ彼女が私のタイプではないにせよ——私の気力を著しく萎えさせることであった。私にとって宮本華子は、女帝西太后か王女メデアか、といったところだ。

浦辺に実験の連絡を頼むのはやめることにした。どうせ授業は金曜なのだ。何も急ぐ必要はない。

担任を持たない私は、授業が終われば暇になる。帰りのホームルームもなければ、掃除の指導もしなくてよかった。部活動の顧問も受け持っていない。今日は会議もない。教委に提出するくだらない書類を作る必要もない。校内の様々な雑務——「校務分掌」で、私に割り当てられているものは一つもない。

学校に長居をする理由は、まったくなかった。早々に帰り支度を始めた。

「あれ、牧さん、もう帰っちゃうの？」

向かいの席の木全きまたがめざとく私の行動を見抜いていた。ノートパソコンの液晶ディスプレイ越しに、木全は丸々と太った顔に薄笑いを浮かべつつ私を見ていた。彼は、下品な顔と声と性格をした英語教師で、私と同じ年だった。私には全く理解できないのだが、なぜか生徒たちの人望は厚いらしい。

「仕事は残ってないからね」

私は素気なく言って、鞆のファスナーを閉めた。といつても、鞆に入っているものと言ったら財布と、身分証明以外に利用したことのない運転免許証くらいなのだが。

「いっつも思うけどさ、昨日も言っただけ？ やる気ねえよなあ、牧さんって」

「2Bの生徒よりは、マシだと思ってるけど」

「そういう問題じゃねえよ。うらやましいよなあ、俺もそういう身分になりてえ」  
木全は眼鏡をずり上げながら言った。

「そう言う木全さんはどうなの？ ホームルームは？」

木全は二年D組の担任だった。同じ三十一歳でも、彼はクラス担任を任せられ、私は非常勤講師に毛が生えた程度の授業しか受け持たせてもらっていない。

木全は「ははあん」というような間の抜けた声を上げた。

「六限は俺のクラスで授業なんだよ。ついでにホームルームもやってきた。その点、ぬかりはねえよ」

「それはご苦労様」

私は鞆を取って立ち上がった。ちらと職員室全体に眼をやる。担任を持っている教師はみな、自分のクラスに出払ったところだった。残っているのは、担任を持っていない教師と、木全のような者だけだった。これまでの経験から身につけた、見とがめられずにさつきと帰るタイミングは今だった。

「そんなに早く帰って何するの？」

「飯、風呂、酒、寝る。それだけだよ」

「あやしいよなあ。俺、前から思ってるんだけどさ、女だろ。キャバクラとか入り浸ってんじゃねえの？」

「そりゃ、木全さんの願望だろう？」

「え、まあ、そうかもしれないが。ま、遊べるときに遊んどきな。結婚しちまえば、もうアウトよ。話したっけ？　うちの嫁さん、こないだ……」

「おととい聞いたよ」

私は木全の横を抜けて、ドアに向かった。今年度になってドアの近くに私の席が配置されたのは、さつきと帰ってもいいと学校が認めたということなのだろうか、と私は勝手に解釈していた。

「おとといって日曜じゃねえか！」

背後から飛んできた木全の声を、閉じたドアが遮ってくれた。

## 水曜

私が入り早めに学校へ出勤するのは、もちろん仕事熱心だからではない。

理由1。通勤ラッシュの前に電車に乗れるため。

理由2。通勤途中に同僚の教師や生徒たちに会わずにすむため。

理由3。駅と学校のあいだにある公園を、人が少ない時間にゆつくりと歩けるため。

暑い夏が去った今の季節、まだ早朝といえる時間にその公園を一人で歩くのは、ちよつとしたせいたくと言えた。ポプラの木々のあいだを吹き抜けて顔にかかる風は心地よく、JRの駅からごみごみした商店街を通り抜けてきた私の体を、学校に着く前にほどよく冷やしてくれる。

この辺りは戦時中の空襲で焼け野原になり、戦後に再開発された新しい街だっ

た。このC公園は、戦時中には軍需工場だった広い敷地に作られたものらしい。今となつては、周囲を威圧するような高層マンションに囲まれ、六十余年前の名残など、どこにも見て取ることはできなかった。

大きな滑り台とずらり並んだ鉄棒のあいだを抜けると、三つ平行に並んだ土管がある。赤い土管と、黄色い土管と、紫の土管——前衛芸術家でもこれほどけばけばしい彩色をしようとは思わないだろう。さらに半年ほど前、三つの土管には一夜にしてマジックペンで卑猥な落書きがびっしりと一面に描き込まれた。それ故、どんなにラリつた芸術家でも産み出すことのできない、エキセントリックでグロテスクなオブジェと化して、公園のなかで異彩を放つことになった。

その土管の横を通り抜けると、ジャングルジムの向こうに県立新陵高校の校舎が見えてくる。見えた瞬間に、これで私のぜいたくなときが終わるのだな、と思わされる。

そして、私の一日が始まる。

一日が終われば、いつもと同様に木全の軽口を背中に受けて職員室を出るだけだ。学校の通用門から外に出て、バス通りを横断して公園に入る。

今日の公園には、珍しく遊び回る小学生の姿が少なかった。いつもなら砂糖に群がる蟻のようにジャングルジムにとりついている子どもたちの姿も、今日は見えない。静かでいいじゃないか、と思いつつも若干の物足りなさや違和感を胸に抱きながら、ジャングルジムの脇を通って土管のほうへ歩いた。

そのとき、幼い男の子が向こうから土管のほうへ駆け出してくるのが見えた。幼稚園に上がったばかりくらいの歳だろう。甲高い歓声を発して、いちばん奥の赤い土管に向かった。

そのときだった。

母親らしき若い女が「ケイタ！」と鋭い声を発した。その表情が穏やかではなかった。怒ったように眼をつり上げ、やや血色まで失っているようだった。名前を呼ばれたケイタ少年は、母親の剣幕に一瞬きよんとした顔つきになった。しかしすぐに母親が彼のもとに駆けつけた。土管から引き離すようにケイタ少年を抱きかかえ、すぐさまくると背を向けて公園の奥へ走り去っていった。

その様子はまるで、人喰い鮫の巨大な口から子どもを救い出しでもしたかのよ

うに、大げさでやや常軌を逸して見えた。母親の姿はもう見えなかった。

土管はいつもと同じ土管に過ぎなかった。人喰い鮫に変身したわけではない。そのなかに動物園から逃げ出した肉食獣が潜んでいるわけでもなかった。

しかし、べつな存在がそこにいた。

最初に眼に入ったのは、シヨップینگ・バッグだった。緑色の紙製で、湿ってふやけている。そしてはちきれんばかりに大きく膨らんでいた。それが、手前の紫の土管の前に立てかけるように置かれていた。

特に深い考えもなく、私はバッグのほうへ歩み寄った。が、数メートル進んだところで、バッグを改めることはやめた。

紫色の土管の奥に、「住人」がいたからだった。

不意に警戒感と嫌悪感の混じった感覚がよぎった。

自分たちとは別の領域に属する者、決して「我々」のなかに入ることはない「彼ら」が身近に現れたという違和感。恐れ。

私もすぐに「しまった」と思った。土管に近づくべきではなかった、と後悔した。しかしそれは、身勝手で理不尽な感覚かもしれない。

土管のなかで男は、膝を抱えるようにしてしゃがんでいた。ところどころ破れた茶色い戦闘服のようなジャケット。同じ色のよれよれの帽子を目深にかぶっていた。帽子の下からはみ出した髪は乾ききって縮れ、肩の上に散らばるようになっていている。

通勤ラッシュのJRの駅前を毎日行き交う人々は、彼らのような野宿生活者が眼中にないかのごとく足早に通り過ぎていく——私もその一人だ。「彼ら」が「我々」に話しかけてくることはない。その逆もまた、なかった。駅という同じ場所にいながら「我々」と「彼ら」は互いに互いを無視し、それぞれがまったく別のルールに従って生活していた。互いにまったく別の道を歩んでいた。互いの道が交わることはなかった。

しかし、この公園では勝手が違った。ここは駅ではない。この公園は、完全に「我々」の領域だった。周囲には高層マンションが立ち並び、学校がある。「彼ら」が安易に立ち入ることのできない場所であった。さっきのケイタの母親の反応は、必ずしも特異なものではなかった。

私も、必死の形相で子どもを呼び寄せた彼女ほどではないにせよ、すぐそこに



いる男からなるべく離れたい、と感じた。そして、そう感じる自分に小さからぬ嫌悪感を覚えた。

私は土管に体をまつすぐに向けて足早に歩いていた。今ここで向きを変えたり足早になったりするのには、あまりに露骨な行為だ。私はできるだけ歩調を変えないようにして、紫色の土管に近づいた。

男は土管から、公園の外のマンションを一心に見つめているようだった。その前を通り抜ける私は、彼の視界を遮ることになる。

そんな些細なことを、私はどうしてこんなに気にしているのだろうか？

その瞬間だった。視界の隅で、男が体をこわばらせたのがわかった。私は顔を動かさず眼だけで男のほうをちらつと見た。

まさか、と思った。

我知らず歩みが遅くなった。男の顔を確認しようとしたとき、男は素早く土管の奥のほうへ顔をそむけた。

私はそのまま紫色の土管の前を通り過ぎた。今、自分の見たものが信じられなかった。きつと、見間違いだ——他人のそら似というやつに違いない。

黄色い土管の前まで来たところで、立ち止まった。そして意を決すると、くると向き直った。紫色の土管まで足早に戻った。

男は土管の奥に顔を向けたまま、動かなかった。私が土管の前に戻ってきたことに、男が気づいていないはずはなかった。男はかたくなに私を無視しようとしているらしい。

迷った。やはり、男のことなど忘れて、さつさと家路を急ぐべきなのかもしれない。

——飯。風呂。酒。寝る。

それで私の一日が終わる。どうして今日に限ってその一日のサイクルを乱さなければならぬ？

「あの、すみません」

しかし私の口は勝手に言葉を発していた。

男は顔をそむけたまま動かなかった。

言ってしまったのだからしかたがない。言葉を続けるしかなかった。

「違っていたら申し訳ないんですが……城戸君じゃありませんか？」

私はそう訊くと、息を吸い込んだ。

かつての親友の名を実際に相手にぶつけるのには、少なからぬ勇気が必要だった。

男は何も答えなかった。

「失礼ですが、城戸君じゃありませんか？」

私はやや大きな声でもう一度質問を発した。

男はそっぽを向いたまま、何かぼそぼそとつぶやいた。それは「人違いだ」と言ったように聞こえた。

そのとき、公園と向かいの高層マンションのあいだの道路から、大きなエンジン音が聞こえてきた。

同時に、男が外に顔を向けた。まるでそのエンジン音を待っていたかのごとくに。

男の顔がはつきりと見えた——こけた頬。張ったえら。高い鼻。そしてやや細く、鋭い眼。

他人のそら似などではない。最後会ってから十年以上たっていたが、見間違えようはずのない顔だった。

高校時代の三年間同じクラスだった男の顔。修学旅行の旅館で、夜にワインの瓶を分け合い、翌朝には教師のビンタを分け合った男の顔。ともに弓道部で、どちらが先の中させるか、どちらが先に「四射皆中」させるか、どちらが先に初段を取るか競い合った男の顔。そのいつぼうで、外見に似合わず繊細なイラストを描く画才に恵まれていた男の顔。どういうわけか美術系の学校へは進まず、私と同じ大学に進学した男の顔。そして二年で大学を中退し、それきり私の前から姿を消した男の顔——

城戸真澄まじみの顔に違いなかった。

懐かしさとうれしさが、躊躇と狼狽に打ち勝った。

「やっぱり城戸じゃないか。僕だよ、牧だ。高校のとき一緒だった牧だよ」

私はまくしたてるように一気に言った。しかし、男——城戸はそんな私の言葉

をろくに聞いていない様子だった。公園の向こうの道路を近づいてくる、クラシカルなデザインの一台の外車——深紅のカルマン・ギアに、その眼は注がれていた。

カルマン・ギアは土管の手前あたりで方向を転じ、向かいのマンションの地下駐車場へと姿を消した。エンジン音も聞こえなくなり、唐突に私たちは静寂に包まれた。

「あの車が……」

どうかしたか、と訊こうとして私は男を振り向き、言葉を飲み込んだ。

男は、茶色い戦闘服風ジャケットの袖をまくり、腕時計を見ていたのだった。ごついミリタリー・ウォッチ風の腕時計だった。買えばかなり高価そうな時計だった。男は私の視線に気づくと、すぐに袖を下ろし、また土管の奥に顔を向けた。

そして彼はくぐもった声で言った。

「人違いだ。あんたなんか知らねえ」

「でも……」

そのとき男はまた外を向いた。今度は、向かいのマンションを見上げていた。私も彼の視線を追った。

公園からは、ずらりと並んだマンションのドアが見える。各階に六つの部屋があった。もつとも、マンションは八階建てという高さで、私たちがいる場所との距離はかなり近いので、せいぜい五階くらいまでのドアしか視界に入らない。それより高い階は廊下の手すりが見えるばかりだった。

その五階の廊下を、今一人の男が歩いていった。おそらくエレベーターがあると思しき廊下の右端から現れ、ゆっくりとした足どりで廊下を進んでいた。私のいるところからでも、男がかなりの長身であることが見て取れた。黒っぽいスーツを着ているようだった。一階から四階までを見渡しても、ほかに人の姿はなかった。男が五階の人影を見つめているのは間違いなかった。カルマン・ギアのドライバーだろうか。

人影は、右から四番目のドアを開け、そのなかに姿を消した。

男は、急に私にすら興味を失ったかのように、土管のなかで横になった。

「今の人、知り合いなのか？」

問いかけたが答えはなかった。男は茶色い帽子を顔の上にかぶせ、胸の上で腕

を組んだ。これから居眠りでも始めるようだった。そんな彼に向かつて、何とか言葉を引き出そうと話しかけている自分の姿が、妙に馬鹿馬鹿しく滑稽に思えてきた。

「あんたなんか知らねえって言ってるだろうが。さつさとどつかに消えてくれよ」  
男は帽子の下からぶつきらぼうに言った。

「わかった……」

私はつぶやいた。男は何も言わずに寝返りを打った。その表紙に帽子が彼の顔から落ちた。男は無造作に帽子を取ると、また顔にかぶせた。まるでそれを私とのあいだの障壁にするかのように。

「もし、僕にできることが何かあれば言ってくれよ。僕は、向こうにある高校で教師をやってる」

答えはなかった。その代わりに、間の抜けたあくびが帽子の下から聞こえた。

私は、ゆつくりと紫の土管から離れた。少し行つたところで振り返つたが、土管のなかの男がこちらを見返すようなことはなかった。小さくいびぎのような音が、紫色の土管のなかから聞こえてきた。

私には、それが本物のいびぎには思えなかったが。

## 木曜

城戸真澄は、数学が大の苦手だった。それなのにどういうわけか、高校三年生になつたとき、彼は私と同じ理系クラスに進んだ。私はてつきり、城戸はその美術的センスをのぼすために、芸大かデザイン系の学校へ進むものとはかり思つていたので、彼の選択には驚いた。当然、彼は数学の授業で苦労することになった。

数学の教師は「長老」とあだ名される初老の先生だった。あるときの数学のテストの際、彼は答案用紙を白紙で提出するのに忍びなく、イラストを描いて出した。城戸の絵のタッチは独特だった。ごくわずかの曲線でたくみに対象の特徴を捉え、デフォルメを加えて再現してみせるのだつた。テストの結果、彼は赤点をまぬがれた。あとで見せてもらった答案には、刀を振り上げた侍姿の「長老」が、土下座をした町人姿の城戸に切りかかろうとする場面が生き生きと描かれていた。その答案用紙を私に見せながら、城戸は「長老もだてに歳とつてねえな」と言った。

城戸真澄はそんな男だった。

その夜は寝付けなかった。しばらくのあいだ、城戸の姿が私の脳裏から去らなかつた。汚れた服を着て、乱れた髪もそのままに、冷たい紫色の土管のなかでうづくまる城戸。彼はどんな夜を過ごしているのか。

木曜の朝は、いつもより三十分以上早く目覚めた。やや早めに家を出た。JRの駅前のコンビニエンス・ストアで買い物をする、いつもよりも速い歩調で学校へ——その途中のC公園へ——向かつた。

やはり、紫色の土管の前にはショッピング・バッグがあつた。男は、立ち去つてはいなかつた。それを見てほつとすると同時に、かすかな警戒感のようなものも抱いている自分に気づいた。私は、男がいてくれることを願いつつも、心はどこかで彼が夜のうちに去つていくことを期待していた。

紫色の土管のなかに、男の姿はなかつた。男はきつと、トイレにでも行つていくのだろうか。

ふと、好奇心に駆られ、土管の外に立てかけるようにして置かれたショッピング・バッグに手を伸ばした。バッグは大きく膨れていて、口のところからタオルか何かが見出ししていた。そのタオルを押し込もうとしたとき、土を踏む足音が聞こえた。顔を上げると、彼がいた。

「やあ、おはよう」

私は彼の持ち物をのぞき見しようとしていた罪悪感を取り繕つて、わざと明るい声で言った。

男は冷ややかに私を見つめ、ショッピング・バッグを抱え上げると土管の奥に放り込み、自分もなかに入つて昨日のようにそっぽを向いた。

「差し入れを持ってきたんだよ」

私は駅前のコンビニの袋を男に差し出した。男は、私のほうを振り返ろうともしなかつた。

私は袋から差し入れの煙草ワン・カートンを取り出し、男に突き出した。しかし彼はかたくなに私のほうを向かなかつた。私は言った。

「ほら、高校のとき、煙草はヘラッキーストライクに限るって言つてただらう。よく覚えてるよ。あれは、確かに二年生の夏の合宿のときだったかな。弓道場の裏に隠れてすばすばやつてたのを覚えてる」

男は答えなかった。まだ無視を決め込むつもりなのか。私はやや頑固な気持ちになって、男に向かつて言った。

「そうだ。あのときおまえ、無理矢理僕にも吸わせたじゃないか。こっちは眼を回しそうになったつけ。そのせいかな、僕は今でも煙草は駄目なんだよ。あれからずいぶんたつけど、おまえの煙草の好みが変わっちゃったかな」

やはり男は沈黙していた。

私はラッキーストライクを男の膝の上に置いた。男は何も反応を示さなかった。私は息を吸い込み、静かに言った。

「やっぱり、城戸なんだろう」

男の肩に力が入ったように見えた。

「どうして答えてくれない？ 確かに十年もたてばいろんなことがあつたかもしれない。けれど——」

「人違いなんだ」

男の鋭く太い声に、私は口をつぐんだ。誰にも何も言い返させないだけの凄みを、彼の声は持っていた。

「あんた、勘違いしてるよ。俺はあんたの友だちなんかじゃねえ。牧とか言ったな。俺にはそんな友だちがいた覚えはねえ」

「城戸……」

「違うって言うてんだろがよ。これ以上、俺に構うな。もう近づくんじゃねえ」

ドスの利いた声で男は言うど、土管のなかで仰向けになった。彼の膝からワシ・カートンのラッキーストライクがぼとりと落ちた。

そのときになって、ようやく私は気づいた。今まで気づかなかった自分を恥じた。

確かに男は城戸に違いない。それは絶対に間違いなかった。しかし、今の城戸は私に——かつて誰よりも仲がよかった私に、こんな場所で親しげに話しかけられることを望むだろうか。相手が私だからこそ、彼は名乗ることができないのではないか。

私ならどうだろう、と考えた。もしも私が彼のような境遇になってしまったとき、その姿を昔の親友に見られても平気だろうか？ 旧友が話しかけてきたときに、その再会を素直に喜び、笑い返すことができるだろうか。

無理だ、と思った。私にはできない。きつと、何も言わずにその場から逃げ出したくなるだろう。かつての知人にひそひそと後ろ指刺されるのはもちろんつらいことだ。しかし、かつての親友に憐れみを受けるのはその何倍もつらいのではないか。

——憐憫。

私は決して、城戸を憐れんで声をかけ、煙草を差し入れたわけではなかった。純粹に、かつての友情を思い出し、あの頃と同じ気持ちで彼に接した——つもりだった。

しかしほんとうにそうだろうか。憐れみとは、どんな美辞麗句で取り繕ったところで、結局は上から下へ流れる感情だ。私の心に、彼の姿を憐れむ感情はなかったのか。優越感とは言わないまでも、彼と自分の境遇を引き比べる気持ちはなかったのか。そして——言葉にするのも嫌らしいが——「施しをしてやった」という自己充足感はなかったのか。

なかった——

と、思いたかった。断言できなかつた。断言できない自分が、この上なく醜く思えた。

「すまなかつた。僕は……」

かすれた声で言いかけると、男はそれを遮った。

「行かなくていいのかよ」

「え？」

「あんた、ガツコのセンセなんだろ？ 生徒に示しがつかないんじゃないのか？」腕時計を見た。彼の言うとおりだった。八時二十五分を過ぎていた。職員会議をサボってしまったようだ。よく見れば、土管の向こうを新陵高校の生徒が何人か駆けていく姿があった。

「しまった、遅刻だ」

私は鞆を抱え直すと、ろくに男のほうを振り返りもせず、学校に向かって駆け出した。

そのときの私は、実は逃げていたのかもしれない。